

●インドネシア有数のキリスト教圏を形成しているバタツクの土着宗教に着目、その再生と変貌を考察。近代化の中で両者がいかに受容されてきたかを動態的に探る。

バタツクの宗教

インドネシアにおけるキリスト教と土着宗教の相克

天理大学 山本春樹 著

したがって、ここでいう宗教には、高度に宗教的な現象から、いわゆる呪術現象までがすべて含まれることになる。このような広がりをもった現象を指す用語として本書では一貫して宗教という用語を用いることにしている。

バタツクの宗教をこうした広がりで見えることによつてはじめて、キリスト教と非キリスト教的土着宗教の乖離を乗り越え、西洋化や近代化や国民国家化に伴う自己認識の分裂の危機を乗り越えようとするバタツク人の努力を視野に収めることができる。すなわち、かれらの宗教学のありようの中に、現在のバタツク文化が立っている地点と、バタツク人が自己の集団としてのアイデンティティを確認しようとする仕方が浮かび上がってくるのである。

このような方法で先述の主題を追求するための手順として、まず、キリスト教伝来以前のバタツクの土着宗教の全体的構図を把握する静態的研究を行う。ついで、この土着宗教とキリスト教が接触することによって起こる変容の動態的研究を行う。

バタツクの土着宗教の全体的構図を把握するためには、キリスト教との接触以前の土着的なバタツク人の宗教学生活を、キリスト教伝道の初期時代の宣教師達による報告と研究から再構成する。この静態的研究の重要な一環として、従来のバタツク宗教研究ではあまり活用されてこなかった、バタツクの宗教職能者ダトゥが書き残した文献であるプスタハの研究を取り入れる。

土着宗教とキリスト教の接触と変容の動態的研究のためには、自身のフィールドワークの成果を使つて、また歴史学分野での研究成果を取り入れ、さらにはバタツク人研究者による神学的・宗教学的の研究を材料にして、キリスト教との接触以後のバタツクの土着宗教の変容の実態とそれが意味するところとを考察することにする。

●目次

序章 問題の設定

- 一 本稿の主題
- 二 バタツクについての概説
- 三 バタツク研究史
- 四 研究のための方法と手順

第一章 バタツク宗教の静態的研究

- 一 バタツク宗教小史
- 二 さまざまなバタツク宗教像
- 三 バタツクの神話、神々、生霊と死霊・祖霊、および儀礼
- 四 集団的儀礼
- 五 個人的儀礼
- 六 バタツクの土着宗教の構図

第二章 バタツク宗教の動態的研究

- 一 バタツク社会の変動
- 二 土着宗教の解体
- 三 土着宗教の再生の試み
- 1 千年王国運動
- 2 祖霊崇拜の復活
- 3 土着宗教の再解釈

終章 まとめ

索引

体裁

- ・A5判・上製・カバー
- ・二八八頁

定価

- ・五二五〇円
- (本体五〇〇〇円)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一-14-9
電話〇三(三)八二八 九二四九
http://www.fukyo.co.jp

注 文 書

流通センター
取扱品

地方出版

発売

風響社

TEL: 03-3828-9249

税込み

五二五〇円

部

山本春樹著

バタツクの宗教

インドネシアにおけるキリスト教と土着宗教の相克

ISBN978-4-89489-113-5 C3039 ¥5000E

[お客様控え]

ご氏名

ご住所

お電話

月 日